

volume
108

JANUARY
2 0 0 9

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

Yada 52-1, Suruga-ku, Shizuoka 422-8526 Japan

inside NEWS



第 22 回剣祭

● CONTENTS ●

剣祭を振り返って	1	モスクワ国立国際関係大学から教員が来学	8
短期大学部大学祭・橘花祭開催！	2	フィリピン大学から短期交換留学生が来学	8
静岡・清水医師会との包括協定を締結	3	活躍する卒業生・修了生	9
「排尿障害モデル動物研究会」の発足	3	教員人事、新規客員教授の紹介	12
ベトナム・国立フエ大学科学大学部と学術交流協定を締結	4	研究助成採択	12
産学連携		受賞	13
イノベーションジャパン2008－大学見本市－	5	図書館だより	15
しずおか新産業技術フェア2008	6	本学教員の著書紹介	17
環境体験実習を実施	6	はばたき寄金からのお知らせ	18
国際交流		ベルマーク集めてます！	19
オハイオ州立大学夏期英語研修プログラムに参加して・・・	7		

第22回剣祭を振り返って

第22回剣祭実行委員会委員長 栗原 瑞穂

皆さんの笑顔の源となるようにと願いを込めながら創り続けた「第22回剣祭」は天候にも恵まれ、11月1日(土)、2日(日)に無事終えることができました。

そして第22回剣祭を終えて思うことは、「剣祭」が人と人をつなぐ架け橋になったという喜びです。私たち実行委員も剣祭に向けて日々準備を重ね、委員同士、時にはぶつかり合いながらも長い時間を共に過ごしてきました。そしてそこには、地域の皆さんや学校関係者の方々、学生の皆さんとの出会いがあり、たくさんの方々の励ましや協力を得て剣祭を迎えられました。

しかし剣祭はこれで終わりではありません。第22回剣祭が静岡県立大学祭の歴史に加わりましたが、また新たな歴史が動き出しています。私たち剣祭実行委員会も、これからも皆さんの笑顔の源となるようなものを創ろうと、より一層努めていきます。今後も実行委員とは異なった視点を持つ皆さんの提言も含め、どうぞ皆さんにもより一層のご協力をお願い申し上げます。

最後に、これからもこのような関係が変わらず続いていくことを願いつつ、実行委員会からもう一度、感謝の言葉を述べさせていただきます。

剣祭にご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。

～当日までの準備～



製作風景



仮装パレードでビラ配り



～剣祭当日～



学長挨拶



チアリーディング



出店の様子

～剣祭終了後～



模擬店No.1決定戦



茶道部のお茶会



剣祭実行委員集合

短期大学部大学祭・橘花祭開催！

短期大学部では、11月1日(土)、2日(日)の2日間、「想（おもい）」をテーマに第12回橘花祭を開催し、多くの来場者で賑わいました。医療・福祉に携わる者にとって、相手を思いやる心は必要不可欠であり、常に心がけていたいという気持ちからテーマを決め、様々な企画を用意、準備を重ねてきました。各学科の特徴を活かした模擬体験の充実、他大学との交流、ライブや各種イベントなど、橘花祭の更なるパワーアップを目指し、久しぶりに2日間での開催を試みました。

1日(土)には、進学相談会も開催し、高校生や保護者の方々の疑問や質問に学科教員が個別に対応しました。短期大学部の雰囲気を感じながら、大学生活への具体的な目標を持つことができたのではないのでしょうか。

【実行委員長の言葉】

企画・準備段階で辛く大変なこともありましたが、その分終わった後の充実感・達成感は言葉に言い表せない程でした。たくさんの人に「楽しかった」「ありがとう」と言っていただき、是非、来年・再来年・・・とつながっていただけたらと思います。

橘花祭



第12回橘花祭 テーマ「想」



県短バンドによる演奏



社会福祉専攻 手作りおもちゃを作ろう



歯科衛生学科の展示
あなたは大丈夫？口臭チェック



進学相談会



特設芝生会場でのイベント



ライブ 他大学との交流

静岡・清水医師会との連携協力に関する包括協定を締結

感染症管理対策委員長 薬学部 教授 小野 孝彦

10月8日に西垣学長と静岡市の大石静岡医師会長及び池田清水医師会長が包括協定を締結しました。この協定は、県立大学、静岡・清水医師会が、地域の医療課題に迅速かつ適切に対応し、地域社会の発展と人材養成に寄与するために、密接な連携と協力を行うことを目的としています。

協定の連携協力事項として、①共同による調査研究及び連携事業の実施、②人的交流の促進・物的資源の相互活用、③地域医療を支える人材の育成を掲げています。

具体的な連携協力事業として、新型インフルエンザ対策、診療所における栄養指導、看護師の卒後教育等があります。このうち、新型インフルエンザ対策として、11月29日(土)に県立大学大講堂において、一般県民・学生を対象に「新型インフルエンザから身を守るための公開講演会」を静岡市静岡・清水医師会や市薬剤師会、市保健所等の協力を得て開催しました。過去に流行したスペイン風邪と呼ばれるインフルエンザの場合、15～35歳の健康な若年者層においてもっとも多くの死亡例がみられ、全体の死亡例の99%が65歳以下の若い年齢層に発生したと確認されています(国立感染症研究所感染症情報センター「インフルエンザ・パンデミックに関するQ&A」より)。このタイプのインフルエンザに対して十分な備えが必要です。

従来型のインフルエンザに対する予防も大切です。若い学生の皆さんも冬の流行期の前に予防接種を必ず受けてください。うがいと手洗い、そして咳エチケットもお忘れなく。



調印式に出席する西垣学長（中央）

「排尿障害モデル動物研究会」の発足

薬学部 教授 山田 静雄

近年、高齢者人口の増加や食生活の欧米化に伴い、前立腺肥大や過活動膀胱などによる排尿障害で悩む人が増加してきております。また、排尿障害は、脳梗塞の後遺症や痴呆患者などの合併症としても発症し、患者のQOLを著しく損なうだけでなく、介護者にも排尿ケアなどの大きな負担となります。最近、治療薬の研究が進展し新薬も登場してきておりますが、他の領域の疾患に比べ薬物の選択肢が未だ少なく、また排尿障害のメカニズムも不明な点も多く、今後の研究に期待するところが大きい疾患です。病態の原因解明や治療薬の開発には、臨床予測性の高い疾患モデル動物の開発を用いた基礎研究が不可欠であります。



第1回研究発表会の様子

こうした背景を基に、排尿障害のメカニズムの解明と新規治療薬開発に寄与することを目的として、標記の研究会を発足し、第1回研究発表会を8月29日(金)、ホテルセンチュリー静岡で開催しました。大学、製薬企業などから約120名が参加し、活発な質疑と情報交換が行われました。本研究会は、世話人として基礎系(5名)と臨床系(10名)の先生にご就任いただき、“基礎と臨床の連携と融合”、“産学連携”を旗頭に、毎年静岡で開催し、第2回は平成21年11月27日(金)に予定しています。産学連携による本研究会は、新薬創製へ最も実現性が高い取組になると期待されますので、実効のある研究会として育てて行きたいと考えております。

ベトナム・国立フエ大学科学 大学部と学術交流協定を締結

環境科学研究所長 岩 堀 恵 祐

環境科学研究所では、ベトナム社会主義共和国・国立フエ大学科学大学部（College of Sciences, Hue University）と学術交流について協議が整ったため、この度、部局間の交流協定を締結しました。調印は、教授・坂田昌弘、客員教授・小川浩、助教・関川貴寛と私がフエ大学を訪問し、科学大学部で行われました。

《調印日と出席者》

平成20年 8 月28日(木)10:00～11:00

(静岡県立大学)

環境科学研究所長・岩堀恵祐、教授・坂田昌弘、客員教授・小川 浩、助教・関川貴寛の4名

(フエ大学科学大学部)

Dean Assoc. Prof. Dr. Nguyen Van Tan, Head Assoc. Prof. Dr. Nguyen Van Manh, Head Assoc. Prof. Dr. Nguyen Van Hop, Dr. Truong Quy Tung, Dr. Pham Khac Lieu, Mr. Hoang Thai Longの6名



学術交流協定書

《協定の概要》

教員及び学生の交流、学術情報の交換、共同研究の実施、その他教育及び学術文化の交流

《経 緯》

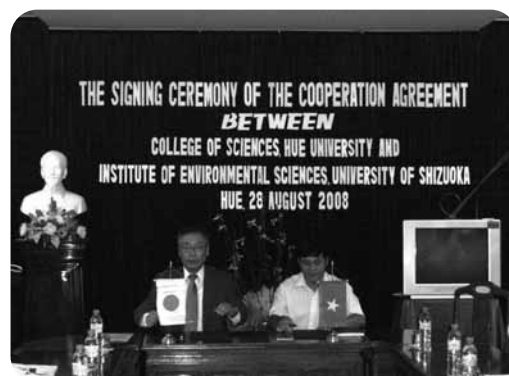
大阪大学が拠点大学となって実施している(独)日本学術振興会の拠点大学交流事業（地球環境総合学分野）のもとで、生活健康科学研究科環境物質科学専攻がフエ大学科学大学部のトン（Truong Quy Tung）講師の留学（文部科学省研究留学生）を受け入れるとともに、教員間の個人的な協力関係もあり、学術交流協定を締結することになりました。

《期待される効果》

フエ大学は、理学・医学・農林・経済・教育・芸術・外国語の7つのカレッジから構成され、ベトナム全土に100以上設置されている国立大学のうち、14大学が指定されている重点大学のうちの1校です。ベトナム中部の中核となる大学であり、その1つのカレッジである科学大学部と学術交流協定に基づき、教員や学生の交流、共同研究、情報交換等が図られることにより、環境科学研究所・生活健康科学研究科環境物質科学専攻における環境科学研究の一層の発展が期待されます。

《参 考》 フエ大学の概略

- ・設 立：1957年3月（教育・理学・文学・法学の4学部でスタート）
- ・現在の構成：7カレッジ、2学部、1分校、その他の研究機関
- ・教 員 数：約1,300名
- ・学 生 数：約18,000名
- ・そ の 他：フエは、1803年のインペリアルカレッジの設立以来、2世紀以上にわたって、ベトナムの高等教育の中心となってきました。フエ市と静岡市は2005年4月12日から友好都市です。



フエ大学での調印式

産学連携

「イノベーション・ジャパン2008－大学見本市」に出展

国内大学の最先端技術シーズと産業界のニーズを結びつける、国内最大級のマッチングイベント「イノベーション・ジャパン2008」が、9月16日(火)から18日(木)の3日間、東京国際フォーラム（千代田区有楽町）にて開催され、3日間で合計45,345名の来場者を数えました。

5年目を迎える今年は、329の大学発の最先端技術シーズ展示や、215の実用化を目指す技術シーズを研究者がプレゼンする「新技術説明会」のほか、講演、シンポジウム、パネルディスカッション、企画プログラムも充実していました。

本学からは、産学連携室が知的財産ブースへ、薬学部の赤井周司教授、植松正吾講師、生活健康科学研究科の酒井坦教授の3名が展示ブースへ出展しました。

また、新技術説明会では、生活健康科学研究科の小林裕和教授、短期大学部の内藤初枝講師が発表を行いました。

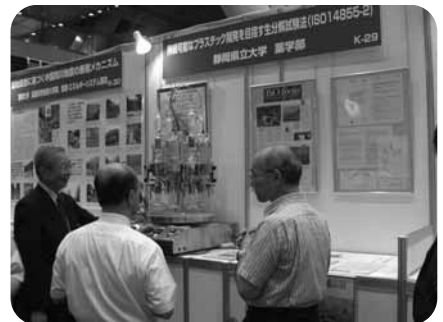
出展ブース・新技術説明会、共に企業を始めとする多くの方々が訪れ、説明に熱心に耳を傾け質問するなど、それぞれの研究成果に関心を持って頂くことができ、今後の共同研究等への可能性を大いに期待させるものとなりました。

出展

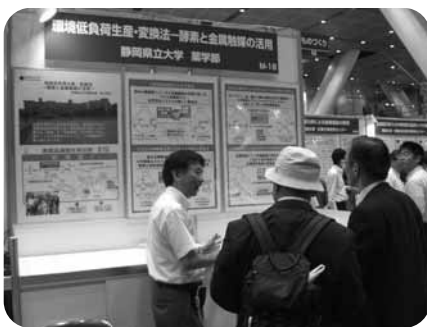
アグリ・バイオ分野	「酵素を使ってサビネンなど機能性モノテルペンを作る」	生活健康科学研究科 酒井 坦教授
ものづくり分野	「環境低負荷生産・変換法－酵素と金属触媒の活用」	薬学部 赤井周司教授
環境分野	「持続可能なプラスチック開発を目指す生分解試験法（ISO14855-2）」	薬学部 植松正吾講師

新技術説明会 発表

「容認性が高い遺伝子操作とLED照射による植物の高付加価値化」	生活健康科学研究科 小林裕和教授
「ビンゴ式食事管理シートおよびその補助ツール」	短期大学部 内藤初枝講師



薬学部植松講師の展示ブース



薬学部赤井教授の展示ブース



生活健康科学研究科酒井教授の展示ブース



生活健康科学研究科小林教授による新技術説明会発表



短期大学部内藤講師による新技術説明会発表



会場全体の様子



知的財産ブース

「しずおか新産業技術フェア2008」で本学の産学連携をPR！

県内のベンチャー・中小企業や大学、行政機関等を一堂に集め、新製品・新技術等のPRや発表の場として開催される総合展示会「しずおか新産業技術フェア2008」が、10月17日(金)・18日(土)の2日間、ツインメッセ静岡にて開催されました。

オープニングセレモニーのテープカットには西垣学長も参加され華やかに開幕しました。94団体が参加した今回は、ユニバーサルデザイン（UD）の社会形成を促進する「しずおかUDプラザ2008」、世界の食品・雑貨・産業用資材が集合した「しずおかインポートフェア2008」も同時開催され、フェア期間中3,310名の方々が来場されました。

本学のブースでは、企業との共同研究成果5件をパネル展示するとともに、成果物であるGABAチョコ（グリコ）、カスピア（フジッコ）、べにふうき茶等を訪れた多くの人に試食、試飲してもらい、その成果を実感していただきました。また、ブース内においても、産学連携委員の先生方を中心に、来場者からの質問への丁寧な対応と説明により大変好評を得ることができました。資料や物品の提供から運営参加に至るまで多くのご支援、ご協力を賜り、企業関係者から一般県民まで多くの方に、本学の産学連携をPRできましたことをご報告するとともに感謝申し上げます。



県知事へ説明する様子



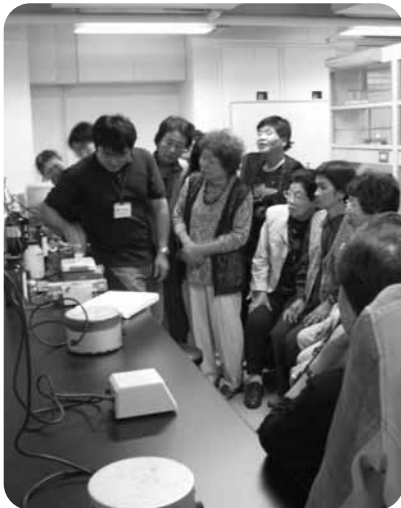
盛況の試飲食コーナー

環境体験学習「バイオエタノールとプラスチックのリサイクルについて学ぼう！」を実施

環境科学研究所の地域環境啓発センターでは、9月29日(月)に、チラシや牛乳パック等のリサイクル活動を熱心に推進されている市民グループ「はまきた・虹の会」の皆様46名を対象に、環境体験学習「バイオエタノールとプラスチックのリサイクルについて学ぼう！」を実施しました。

参加者からは、「今回の実験でバイオエタノールが未来のエネルギーとして非常に希望の持てる燃料であることを改めて知りました」「ペットボトルから実際に繊維を取り出せたことは新たな発見でした」「今回の実験は目からうろこが落ちた思いでした」などの感想が述べられ、実際に体験することの大切さや楽しさを十分感じていただきました。

参加者からは、「今回の実験でバイオエタノールが未来のエネルギーとして非常に希望の持てる燃料であることを改めて知りました」「ペットボトルから実際に繊維を取り出せたことは新たな発見でした」「今回の実験は目からうろこが落ちた思いでした」などの感想が述べられ、実際に体験することの大切さや楽しさを十分感じていただきました。



プラスチックのリサイクルの実験風景



バイオエタノールの実験風景

International Exchange Programs 国際交流プログラム

2008年オハイオ州立大学夏期英語研修プログラムに参加して

国際関係学部 国際言語文化学科 1年 簗田 菜里

私はこの夏、私たちの大学と協定を結んでいるアメリカ・オハイオ州立大学（OSU）での静岡夏期語学研修（SSEP）に参加しました。毎日、英語だけが聞こえるという憧れの環境で過ごした3週間は忘れることができません。

[授業]

私達SSEP参加者12名はSueに毎日の授業を担当していただきました。Sueは大変物知りで、歌が大好きな素敵な先生でした。研修中のプログラムはどれも思い出深いものばかりでしたが、その中で私が最も印象に残ったのが「パスポートプログラム」でした。これは、私達SSEP参加者が子ども達に日本の文化を伝える、というものです。楽しみにしていた反面、相手が「子ども」であることと自分の英語力に不安があり、心配でした。しかしそれは杞憂で、子ども達はここにこしなから私達の国の文化と触れ合っていました。彼らの笑顔は今でも心に残っています。



パスポートプログラムの子供たちと

[英語の難しさ]

このプログラムでは参加者一人一人にconversation partner（教室外で英語学習を週6時間手助けしてくれる現地学生）がつきます。毎回、私はpartnerであるAnnaと電話かパソコンのメールを使って、いつ・どこで会うのかを決めていたのですが、この連絡の取り合いがなかなか難しいのです。特に、電話の場合、相手の表情も見えず、しかも相手は早口の英語で話しかけてくるので毎回の電話がものすごく難しいリスニング問題のようでした。あちらの大学の先生もおっしゃっていましたが、英語を母語としない人にとって、電話が最も難しい連絡手段だそうです。帰国してから、Annaに電話をか

けてみましたがやはり難しかったです。当分、これが私の課題となりそうです。

[host family]

週末は一度だけ2泊3日でhost familyの家に行きました。彼らは私を色々な場所に連れて行ってくれました。私の希望で五大湖のうちの一つである、Lake Erieにも行きましたし、朝市や近くのモールにも行きました。朝市では、新鮮な野菜等が売られており、子ども達が広場の真ん中でバイオリンのミニコンサートをやっていました。日本では絶対に目にし

カンバセーションパートナーの人たちと
(前列右端が筆者)

ない光景がそこにはあり、それはまるで絵本の1シーンのようでした。モールでは、買い物をしていると館内放送で突然日本語が流れました。久々の日本語に驚き、また、それほど毎日自分の耳に日本語よりも英語が入ってきているのだなぁと感じた瞬間でした。

[研修を終えて]

確かに、研修中、自分の国の文化とアメリカの文化の違いを毎日感じ、なんだか変な気持ちになることも多々ありました。けれども、この研修のおかげで自分の、他の国の言語や文化について知りたい・勉強したいという気持ちを再確認することができたように思います。「英語」だけの環境、OSUのみんなやhostfamilyと過ごした日々、毎日が大変幸せでした。

最後に、研修中お世話になった先生方、すべての方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

モスクワ国立国際関係大学から教員が来学

本学と交流協定を締結しているロシアのモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）からジャーナリズム学部のセルゲイ・チュグロフ教授が来学し、10月3日から1ヶ月半滞在されました。

本学教員と、「黒海周辺地域、広域ヨーロッパをめぐる国際政治」をテーマに共同研究されました。



学長と懇談するチュグロフ教授

フィリピン大学から短期交換留学生在が来学

本学と交流協定を結んでいるフィリピン大学から短期交換留学生在が来学し、10月から本学で学んでいます。

来学したのは、チャーリーン・ケイ・バスィランさんで来年3月まで滞在予定です。

フィリピン大学では、人文社会科学部で言語学を専攻していますが、コンピューター・クラブの活動で表彰されるなど、学業以外でも活躍されています。

本学では、国際関係学部の小幡教授の指導のもと、日本語や日本文化などを学んでいます。

短期間ではありますが、数多くの友人に出会い、素晴らしい思い出が得られることを願っています。



学長と懇談するケイさん(左)、右は小幡国際関係学部教授

【参考】

交流協定を締結している海外大学への短期留学・語学研修

本学は、現在までに世界10ヶ国14大学と大学間交流協定を締結しています。現在、その内のモスクワ国立国際関係大学（ロシア）、フィリピン大学（フィリピン）、リール政治学院（フランス）に例年、本学の学生が1、2名短期留学しています。

留学期間は、原則6ヶ月～1年です。

また、浙江大学（中国）、ニューキャッスル大学（イギリス）、オハイオ州立大学（アメリカ）で行われる語学研修、語学教育インターンシップ（オハイオ州立大学）にも参加しています。

夏期または春期に行われ、期間は3週間程度です。

本学では、今後も短期留学・語学研修プログラムの拡充を図っていきたいと考えています。

活躍する卒業生・修了生

～ 薬学部・薬学研究科編 ～

大学病院という職場で1年が経過して

私は現在、千葉大学医学部附属病院の病院薬剤師として勤務しております。

小さい頃から病院へ通うことが多く、薬学部入学以前から臨床薬剤師を志しておりました。大学院在学中は臨床薬理学講座に籍を置き、静岡県立総合病院薬剤部で実習をさせていただきながら修士課程の研究を行いました。大学院修了後は千葉大学医学部附属病院薬剤部の研修生となりました。大学病院は診療に加えて教育・研究を担っているという特色があり、そのような現場で実務研修を行いました。

研修では調剤業務や注射剤混合調製業務、薬剤管理指導業務を学びました。また臨床試験部では治験審査委員会の見学や治験コーディネーターの業務見学など治験に関わる薬剤師の活躍を知りました。さらに薬物血中濃度測定によるTDM業務を担当する試験・研究室を1ヶ月間ずつ研修しました。そういった病院薬剤師としての実務に加えて、与えられた課題に対して調査・研究を行い、その成果を発表することも研修内容として含まれていました。私は「小児造血幹細胞移植前処置におけるブスルファン母集団薬物動態パラメータの評価とベイジアン法への応用」というテーマで研究を行い、その結果は私が主体的にはありませんが学会等で発表されました。研修期間は無給ですが、実務や研究課題などについて自主的に勉強することができ、とても充実したものでした。その後、平成19年9月より職員として採用されました。

現在、私は主に調剤業務、消化器内科病棟の薬剤管理指導業務に従事しております。採用当初は疾患や医薬品の知識が不十分であったことに加え、さらに調剤内規などのきめ細かい運用を覚えることで精一杯でした。職員となってから1年が過ぎましたが、まだまだ知識不足であると感じるとともに、学生の時は自分には容易なことであると考えていた病棟における他職種とのコミュニケーションの難しさに悩まされています。

しかし先輩薬剤師の病棟活動を間近で見ると、患者を中心とした治療の中で生ずる問題点に対し、きちんと根拠に基づいて薬剤師としての意見を提示することにより医師との信頼関係を築いていくのだということがわかりました。また、そういった問題を解決していくという行動の中から研究のポイント

平成18年度 薬学研究科博士前期課程修了

現・千葉大学医学部附属病院薬剤部勤務 高塚 博一

を見出し、新たなエビデンスを創り出して公表することで多くの患者に役立てることが出来ます。大学病院での研修を志望した理由には研究という面がありますが、職員としての業務と研究は密接に繋がっているのだということを実感しました。

現在薬剤部職員は50余名おりますが、病院薬剤師としての業務拡大のために人員が増加している状況にあり、年齢が近くなんでも相談できる先輩がいることが今の自分にとって幸いなことです。私は技術補佐員での採用であり正規の職員ではありませんが、自分の考えていることを真正面から受け止めて意見をくださる先輩がいる、そういった環境で仕事をすることに非常にやりがいを感じております。実務と研究どちらにおいても主体的に行えるような病院薬剤師を目指し、これからも精進していきます。



職場の先輩と 左側が筆者



先輩とバイクでツーリング

臨床現場から

私は薬学研究科の博士後期課程医療薬学専攻に在籍しており、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部の特別研究学生として臨床研修を行っています。臨床研修では、薬剤師の臨床実務実習に加え、医療現場で働く薬剤師の視点に立った薬物治療の改善や患者QOLの向上を目的とした臨床薬学研究を行っています。臨床コースでは主に医療機関で研究活動を行うことから、臨床試験の実施や医療統計学についても深く学ぶことができます。それらの研究活動を通じて、臨床薬剤師や他の医療従事者とも交流する機

平成18年度 薬学研究科博士前期課程修了

現・薬学研究科博士後期課程2年在籍 見野靖晃

会があるため、薬剤師としてのアイデンティティを実感するとともに、自分の将来像を描きやすいと感じています。



第28回日本臨床薬理学会年會にて

特許審査官を目指して

皆さんこんにちは。私は、平成19年度の薬学研究科修了生です。所属していた研究室は、薬品製造化学教室で、今年4月から特許庁で働いています。「活躍する卒業生・修了生」などと大それたタイトルで書かせていただいているが、社会人になってまだ半年なので、中身は皆さんとあまり変わらないのではないかと思います。そこで、ここでは私が就職した特許庁の紹介と、自分がこの仕事を選んだ理由を書きたいと思います。

特許庁は、経済産業省の外局にあたり、発明、実用新案、意匠、商標に関する事務を行う機関です。その組織は大まかに、庁務の総合調整等を行う総務部、出願、登録、方式審査、及び、意匠・商標の審査を扱う審査業務部、発明の審査を扱う特許審査第一部～第四部、産業財産権に関する審判を扱う審判部から構成されています。

私が所属しているのは特許審査第三部で、化学に関する発明の審査を行う部署になります。仕事の内容は、企業や大学などで生まれた発明を、特許として認めるべきか否かを判断するというもので、わかりやすく言うと、先行技術と比べて新しいか？また先行技術から簡単に思いつかないか？を評価するというものになります。現在私は、審査官補として、審査官の指導の下、審査をしながら、正確な判断力を身につけるために、特許法やそれに関連する法律、更に、審査の基準などを学んでいます。

それでは私はなぜ特許庁に入ろうと思ったのか？研究者の利益を守り、知財立国日本の未来を支える仕事に魅力を感じ、以前からこの仕事にあこがれていたから...というのがこういう体験談の模範解答なのでしょう。しかし、残念ながら私にはそういう美談になるようなものはありません。というより、もともとは博士後期課程への進学を希望していたので、修士1年の頃は専ら研究漬けの日々を送っ

平成19年度 薬学研究科博士前期課程修了

現・特許庁勤務

磯部洋一郎

ており、自分がこのような道に進むことなど想像もしていなかったというのが実際のところですよ。

私が現在の仕事のことを知ったのは、実は修士1年の終わり頃で、偶然読んだ公務員のパンフレットを通して、特許審査官の仕事を知り、研究に関係する分野の仕事ということで興味を持ったのがきっかけでした。そして、この仕事に魅力を感じたのも、自分が勉強してきた化学を生かせるのと、常に最先端の技術に触れることができるからという、就職の動機としてはあまりに軽いと、自分でも認めてしまうような内容でした（もちろん、他にも理由はありましたが...）。もっとも、もともと将来は研究をと考えていた私ですので、実際に研究の道をあきらめることについてとても悩み、また多くの人と相談したうえでの決断であったのも事実です。

しかし最終的には、どちらも興味がある仕事だったので、どうせやるなら、困難が多い方が、何かに挑戦し、また乗り越える楽しみがあるだろうし、苦労しそうな道を選んだ方が後悔しないだろうと考え、現在の道を選択しました。（もちろん研究も茨の道だと思いますが...）。実際、特許庁での仕事は、法



特許庁からの風景

律というそれまでほとんど縁のなかった分野の勉強なので、とても苦労していますが、その反面、新しいことを学ぶ毎日を楽しみつつ、自身を成長させられる日々喜びを感じております。

私は、どんな仕事を選んでも困難はついてくるものだと思います。しかし、その困難を楽しめる仕事を選ぶのが、よい仕事選びなのではないのかと感じます。私にはまだ、「この道を選んで正解だった！」と、胸を張って言えるほど社会人としての経験はありませんが、なかなか慣れない業務に悪戦苦闘しな

がらも、今の仕事を選んでよかったと感じています。

皆さんの参考になるようなことはほとんど書けませんでした。皆さん一人一人が興味を持って取り組める仕事に出会い、そして、その分野で大いに活躍されることを、私は大学OBとして、心からお祈りしております。

★ 次回は、食品栄養科学部・生活健康科学研究科編を掲載します。

研究者を目指して

※ 研究者として国内外で活躍する卒業生・修了生を紹介するコーナーです。

私は静岡県立大学の短大部を卒業した後、静岡県立大学の食品栄養科学部に入学しなおし、大学4年、修士1年（飛び級）、博士課程後期2年（退学）、社会人学生3年の合計12年の間、静岡県立大学に在学しました。短大の食物栄養学科に入学した頃は、特に目標もなく、食べ物のことを勉強し、栄養士資格を取れば将来、家庭に入った時に役に立つだろう、と考えていました。栄養学科の特徴かもしれませんが、まじめで大人しい学生だったと思います。ところが、短大2年次の実験で低たんぱく食にて飼育したラットの肝臓が真っ白になった（たんぱく質の不足による脂肪肝）のを見て、とても驚き、生まれて初めて“もっと勉強したい”と強く思いました。自分でやりたいと思って努力して手に入れた環境だったからでしょう、大学入学後、特に研究室に配属されてからの勉強や実験は非常に楽しいものでした。

学位取得後は、アメリカのアトランタにあるエモリー大学の医学部にて博士研究員として2年間働きました。アトランタは人口500万人を超える大都市でありながら、豊かな緑の茂る広大な森林都市です。研究室のメンバーは、アメリカ、中国、イタリア、スペイン、ブラジルと多国籍で、服装も習慣も考え方も人それぞれ、皆が違うことが当たり前です。少々変わっていても、変な目で見られたり、驚かれたりすることは



自然に囲まれたエモリー大学（手前）とアトランタのダウンタウン（右上）

ありません。日本の狭い環境や人間関係、“常識”に慣れた私には、アトランタの豊かな自然と多種多様な考えを持った人々

平成10年度 生活健康科学研究科博士前期課程修了 現・食品栄養科学部助教 宮城 栄重（旧姓大川）

はとても新鮮で、すばらしい開放感を感じました。同時に、人生は自分の力で自由に楽しみたい、という気持ちがさらに強くなったと思います。



エモリー大学の研究室のメンバー
（右から2番目が筆者）

今は県立大学食品栄養科学部の臨床栄養学研究室の助教をさせてもらっています。主な仕事は、自分の研究を立案・実験して結果を発表して行くことと、研究室に所属する学生さんの実験を指導することです。専門分野は腎臓病の栄養学で、研究内容はいくつかありますが、例えば腎機能の低下した患者さんが行う低たんぱく食事療法をより効率的で実行しやすくするために、動物実験などを行って低たんぱく食が腎臓を保護するメカニズムを解明しようとしています。研究は地道な実験の繰り返しで忍耐力が必要ですが、良い結果が出た時や研究内容が認められて論文になった時は強い達成感や満足感を感じることが出来ます。苦勞も色々ありますが、それを差し引いても今の仕事を200%楽しんでいると思います。

しかし、研究職に就くことはなかなか難しく、最近大学の助教や博士研究員になっても2～5年程度の任期がついていることが一般的です。私の場合も任期がありますので研究成果を挙げて認められなければ研究職を続けていくことは難しいでしょう。いつまで続けていけるかは分かりませんが、チャンスと研究への情熱が続く限り、楽しみながら頑張っていきたいと思っています。

教員の人事、新規客員教授の紹介

■教員の人事

●就任	(平成20年12月1日付け)		●採用	(平成20年11月1日付け)	
奥村 昭博	経営情報学研究科長		光延 聖	環境科学研究所	助教
●採用	(平成20年10月1日付け)		●昇任	(平成20年10月1日付け)	
奥村 昭博	経営情報学部	教授	岩崎 邦彦	経営情報学部	教授
森田 洋行	薬学部	助教			

■新規客員教授

原 征彦	農学博士	H.20.10.1~23.3.31	柴本 崇行	カリフォルニア大学デービス校 環境毒性学部教授	H.20.10.1~23.3.31
------	------	-------------------	-------	----------------------------	-------------------

研究助成採択

平成20年度(財)アステラス病態代謝研究会研究助成金

研究者：薬学部 准教授 阿部郁朗

研究課題：植物ポリケタイド合成酵素を用いた生理活性アルカロイドの効率的酵素合成

平成20年度静岡市産学交流センター地域課題にかかわる産学共同研究受託事業

研究者：食品栄養科学部 教授 横越英彦

研究課題：GAVA茶と自律神経活動に関する研究

平成20年度やずや食と健康研究所研究助成

研究者：食品栄養科学部 助教 成川真隆

研究課題：身体の生理状態が食行動に与える影響 運動性疲労と味覚感受性の関係

平成20年度文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業

研究者：研究代表者 関西大学 教授 孝忠延夫

研究分担者 国際関係学部 講師 松森奈津子

研究課題：マイノリティと法——21世紀における「国家と社会」のパースペクティブ

平成20年度(財)静岡総合研究機構学術教育研究推進事業費補助金

(学会開催助成)

研究者：経営情報学部 教授 小山秀夫

学術集会名：第46回日本医療・病院管理学会学術集会

(静岡県SOE助成)

研究者：薬学部 助教 関 俊哲

研究課題：ヒト爪のメタボローム解析及び生活習慣病の新規バイオマーカーの探索

研究者：経営情報学部 教授 西野勝明

研究課題：産業集積の発展過程における環境の変化と適応能力—産業集積生態論の視点から

平成20年度(財)生命保険文化センター研究助成金

研究者：経営情報学部 助教 上野雄史

研究課題：カナダ・オーストラリアの保険負債の公正価値評価への取組に関する調査研究—日加豪の国際比較—

平成20年度住友財団環境研究助成

研究者：環境科学研究所 教授 下位香代子

研究課題：ハロゲン化多環芳香族炭化水素類の生体内蓄積性と血管への影響

■平成20年度天然物化学談話会奨励賞を受賞

薬学部生薬・天然物化学分野の森田洋行助教が、平成20年度天然物化学談話会奨励賞を受賞しました。天然物化学談話会は天然物有機化学だけでなく、「Life Sciences」に関わる薬化学、有機合成、分子生物学など様々な分野の研究者が一同に会し、アカデミックな講演会を聴き「熱い議論」をたたかわせる「若手の会」です。天然物化学談話会では、天然物化学分野もしくは生物有機化学分野において顕著な研究業績を挙げるとともに、将来、これらの分野で活躍することが期待される若手研究者を奨励するこ



左から3人目が森田助教

とを目的として、天然物化学談話会奨励賞を設けています。今回受賞の対象となった研究テーマは「植物ポリケタイド合成酵素の構造と機能に関する研究」で、単独での受賞となりました。10月1日の授賞式（福岡）では、岸義人ハーバード大学教授、中西香爾コロンビア大学教授、森謙治東大名誉教授など、学会の重鎮の先生方とともに記念撮影が行われました。森田洋行助教は来年夏の天然物談話会（筑波）において受賞講演を行います。

■Tetrahedron, Most Cited Paper 2005-2008 Award を受賞

薬学部医薬品化学教室の佐藤雅之教授、鈴木由美子助教らが国際的な学術雑誌 Tetrahedron のMost Cited Paper 2005-2008 Award を受賞しました。この賞は、同誌に2005年から2008年の間に掲載された論文のうち他の論文による引用回数が最も多い上位 50 位の著者らに授与されたものです。受賞の対象となったのは2006年に同誌62巻17号4227-4231項に掲載された論文「Cyanosilylation of aldehydes catalyzed by N-heterocyclic carbenes.」です。本論文は、有機分子を触媒として用いた重要な化学合成中間体の合成法を報告したもので、佐藤教授、鈴木助教等の開発した触媒反応は、環境に優しい、新しい合成法として国際的に高く評価されています。



■日本生物工学論文賞を受賞

生活健康科学研究科の丹羽康夫助教は、第16回生物工学論文賞を受賞しました。同賞は社団法人日本生物工学会が発行する前年の学会誌に掲載された論文の中から、生物工学の進歩に寄与した論文に授与される賞です。8月27日(水)～29日(金)まで、東北学院大学土樋キャンパスにおいて開催されました、第60回日本生物工学会大会（2008）において授賞式が行われました。授賞の対象となった論文は、Journal of Bioscience and Bioengineering 誌 Vol.104 No.1 pp.34-41に掲載された「Development of Series of Gateway Binary Vectors, pGWBs, for Realizing Efficient Construction of Fusion Genes for Plant Transformation」です。先の日本農芸化学会によるBBB論文賞に続く受賞となりました。



丹羽助教

■2008年度環境科学会論文賞を受賞

環境科学研究所の坂田昌弘教授は、9月18日に東京都千代田区丸の内のサピアタワーで開催された環境科学会2008年会において、2008年度環境科学会論文賞を受賞しました。受賞対象となった論文は「日本海側における水銀等化学成分の大気中濃度と湿性沈着量の季節変動」で、丸本幸治氏（国立水俣病総合研究センター）との共著論文です。本論文は島根県松江市において、大気中のガス状および粒子状水銀濃度と水銀の湿性沈着量を1998年から3年間にわたって観測した結果をまとめたものです。同教授らは水銀による環境汚染について継続的に緻密な調査を実施し、これまでに非常に貴重な調査結果を報告してきました。本受賞では、環境科学の重要な研究対象物質である水銀について、今後の中国大陆からの越境汚染の拡大による影響を評価する際に基礎となるデータを提供したことが評価されました。



坂田教授（右側）



坂田教授（右側）

■Young Investigator Awardを受賞

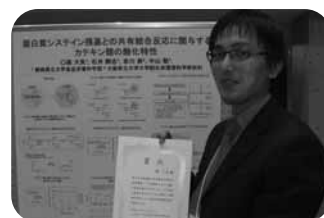
生活健康科学研究科食品栄養科学専攻の生化学研究室の博士後期課程3年伴野勸さんが、10月15～17日に軽井沢プリンスホテルで開催された国際学会Lipid peroxidation 2008においてYoung Investigator Awardを受賞しました。発表タイトルは“Formation of cholesterol ozonolysis products by differentiated neutrophil-like HL-60 cells activated with phorbol myristate acetate”で、生活習慣病発症メカニズムに関する基礎的データの報告が評価され受賞に至りました。なお同賞は、世界中から本学会に参加した多くの若手研究者の中から優秀な研究成果を発表した6名（国内3名、国外3名）が選ばれており、伴野さんは3名の日本人受賞者の中で最も高い評価を受けました。



伴野勸さん

■日本農芸化学会中部支部例会でポスター賞を受賞

生活健康科学研究科食品栄養科学専攻博士後期課程2年の森大気さん（食品分子工学研究室）は、11月1日に名古屋大学で開催された第153回日本農芸化学会中部支部例会で、ポスター賞（維持会員賞）を受賞しました。この賞は、ポスター演題の中から特に優秀な発表であった学生に贈られる賞であり、森さんの「蛋白質システイン残基との共有結合反応に関与するカテキン類の酸化特性」の発表が研究内容や発表スキルにおいて高い評価を受けました。



森大気さん

■香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会でベストプレゼンテーション賞を受賞

生活健康科学研究科食品栄養科学専攻修士課程2年杉浦瑞枝さん（食品タンパク質工学研究室）は、10月25日から27日にかけて東洋大学板倉キャンパスで開催された香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会（TEAC2008）でベストプレゼンテーション賞を受賞しました。演題は「レモンマートル由来新規リナロール合成酵素遺伝子のクローニングと酵素の機能解析」でした。この賞は学会の発展に貢献している優秀な一般講演を行った研究者に対する賞で賞状と副賞を授与されました。



杉浦瑞枝さん

■ベストプレゼンテーション賞を受賞

生活健康科学研究科環境物質科学専攻の博士前期課程2年（環境工学研究室）の小林祐子さんと鈴木則志さんは、日本水処理生物学会第45回大会（秋田大会）で、ベストプレゼンテーション賞を授与されました（11月13日）。同賞に推薦された22演題の中から、特に優れた研究発表6演題が選考されたもので、同じ大学からの同時受賞は初めてです。発表演題は次の通りです。

小林祐子さん

「じゃがいも粕と豆腐粕の混合原料からのバイオエタノール生産」

鈴木則志さん

「天然素材の活性汚泥凝固能並びに重金属吸着能の評価」



小林祐子さん



鈴木則志さん

図書館だより

1冊の本の出会いから人生が変わることもあります。図書館では、所蔵している34万冊の資料とみなさまとの出会いの場を提供するために、トピックや時節に応じたテーマを設定し、資料のミニ展示を行ってきました。今回はその様子の一部をご紹介します。



6月には、県立中央図書館所蔵の宮澤賢治の絵本と大学図書館が所蔵している宮沢賢治関係の図書や学術論文、視聴覚資料をあわせて展示しました。賢治の作品は子どもの頃あるいは中学・高校生時代に読んだ学生も多く、看護学部の学生は「子どもの頃、岩手県に住んでいた祖母がよく宮澤賢治の話をしてくれました。」と懐かしそうに絵本を読んでいた。

8月には、隣接する県立美術館の「鑑真和上展」にあわせて、鑑真や唐招提寺などの関係資料の展示を行いました。普段あまり手にすることのない大型の美術書や写真集に興味をもって見ていただくことができました。



8月、9月には、「オープンキャンパス」や県民の日の記念事業「キャンパスツアー」にあわせて、県立大学の歩みや大学で発行している図書や紀要、年報、新聞の記事などの資料を展示し、学外の多くの方々に県立大学の活動の様子を紹介することができました。

11月には、舞台芸術センターから依頼を受け、センターの秋の演目『ハムレットとドン・キホーテ』にあわせて、シェイクスピアやセルバンテスの原作や関連書籍、視聴覚資料を展示しました。本を読んで演劇を見に行く学生や、演劇を見た後改めて原作を読んでみようとする学生もおり、文化・芸術の秋を図書館から感じてもらうことができました。



12月から1月にかけてはノーベル賞授賞式（12月10日）にあわせ、ノーベル賞受賞関係資料を展示しています。多くの方々の来館をお待ちしています。

《 本学教員からの寄贈著書 》

図書館では、出版された先生方の著作の寄贈をお願いしています。寄贈していただいた資料は図書館2階の「自由閲覧室」に配架してありますので、先生方の最新の研究成果に触れてみてください。

平成20年9月から10月までに図書館に寄贈していただいた先生方の著作は次のとおりです。

- ・栗山 孝雄先生（食品栄養科学部）
『青少年のための科学の祭典 第11,12回：静岡大会：実験解説集』青少年のための科学の祭典静岡大会実行委員会編集 [同] 静岡大会実行委員会（407/Se 19）
- ・小島 茂先生（経営情報学部）
『学位商法ーディプロマミルによる教育汚染ー』小島茂著 九天社（377.5/Ko 39）
『学歴汚染ー「日本型学位商法（ディプロマミル）」の衝撃ー』小島茂著 学歴ネット/展望社（発売）（377.5/Ko 39）
『心のコミュニケーションー自己実現・自己発見・自己表現のためのー』小島茂著 学文社（146.1/Ko 39）
- ・西田 ひろ子先生（国際関係学部）
『グローバル社会における異文化間コミュニケーション』西田ひろ子編著 風間書房（336.4/N 81）
- ・前坂 俊之先生（国際関係学部）
『百寿者百語ー生き方上手の生活法ー』前坂俊之著 海竜社（159/Ma 28）
『傑作国策標語大全』前坂俊之監修 大空社（917/O 89）
- ・渡辺 達夫先生（食品栄養科学部）
『トウガラシー辛味の科学ー』岩井和夫、渡辺達夫編 改訂増補 幸書房（619.91/I 93）

シリーズ 私の1冊の本

図書館では、「私の1冊」と題して、先生方が今までに読んで、感動し心に残った本をシリーズで紹介しています。紹介された図書は、県立大学附属図書館の書架に配架してありますので、是非この機会に読んでみてください。

薬学部薬学科 准教授 左 一八

紹介図書：『がん研究レース ―発がんの謎を解く―』

著者名：ロバート・A.ワインバーグ著 野田 亮, 野田洋子訳

出版社名：岩波書店

I S B N : 4-000-05187-3

図書館所蔵：閲覧室 2 階 491.65/W 55



本書の著者は、マサチューセッツ工科大学（MIT）卒業後、研究員としてイスラエル・ヴァイツマン研究所、米国カリフォルニア州・ソーク研究所を経てホワイトヘッド生物医学研究所およびMIT教授を歴任した、第一線の分子生物学者である。1982年に実験的に細胞のがん化（正確にはトランスフォーメーション）を起こすことに世界で初めて成功し、ヒトがん遺伝子を同定するという発がん研究の中心となる業績をあげている。本書では、著者が単に分子生物学黄金期のがん研究の歴史を記述するにとどまらず（これだけでも読む価値はある）、その研究の中心で活躍した著者自身の個人的な回想場面が多く語られており、科学者としての成長の過程を描いている。まさに「事実は小説よりも奇なり」を地で行く物語である。著者がまだMITの研究員だった頃の以下のようにくだりがある。「私の憂うつは深まった。明らかに私の所属する研究部門は、私が最近やり始め、まだ成果を得ていない実験とよく似たことをやらせるために人を雇うとしている。それは私にとっては、はっきりとしたメッセージであり、…（中略）…それをやってのけられる人物を見出した人々からの手ひどい仕打ちだった。」少し続いて以下のようにくだり、「私の研究経歴における一つの区切りが、はっきりと視界に入ってきた。」。研究員として実績を積み上げていこうとしている時に起きた実際の出来事を回想した記述である。優れた科学者は最初から優れていたのではなく、信じ続けて（これがとても難しいのだが）いくつもの挫折を乗り越えて初めてそうなることを改めて気づかせてくれる。研究分野に関わらず、これから研究者を目指す人（いや、研究者でなくともこれから社会に出る人たち）に是非一読してほしい。なお、最近日本でも新聞などを賑わしている科学データのねつ造をした人物も登場する。実は著者を上述のような気持ちにさせるまでに追い込んだ人物である。そこから形勢逆転、新しい着想で研究に取り組み、そして…。ここから先は実際に読んでください。

国際関係学部国際言語文化学科 准教授 藤巻 光浩

紹介図書：『人文学と批評の使命』

著者名：エドワード・W.サイード著 村山敏勝, 三宅敦子訳

出版社名：岩波書店

I S B N : 4-000-23423-4

図書館所蔵：閲覧室 1 階 902/Sa 17



近年、日本の大学では教養教育を復活させる動きが活発化している。この教養教育は、はたして専門化をさらに推し進めることを前提とした言語能力の養成とリンクした教養教育、つまり専門化のための通過点に過ぎないのだろうか。

古代ギリシアから脈々と続いてきた「教養教育」は、現在、決して細分化される専門教育のためのものではなく、地球上に生きるものの意味を総合的に考える市民教育そのものである。表面的なコミュニケーションの習得を目指す言語教育や、専門家の視点だけを反映する排他的な知識産出は、本来人文学を基盤とする教養教育とは関係がない。エドワード・W.サイードは、「専門」化されすぎた学術領域の編成に対して厳しい目を向ける。

出版される前にサイードが亡くなったため、本書は事実上の遺稿となる。数ある彼の著作の中で本書を紹介する理由は、「人文学」という微臭く聞こえる領域のあり方を再度見直すための知見にあふれ、「教養教育」全般について考え直す契機に溢れるためである。

人文学とは、テキストの解釈を通じ「一つの領域、人間経験の一つの分野から別の分野への翻訳」をおこない、「（知識の）一部を他の部分とつなげ、注意を払う領域を広げて、適切性の範囲を拡大」してゆくことである。しかし、これは単に解釈の方法を変化させるという単純な作業ではない。自分自身の立つ場所、歴史を再考し、目に見えない人々への想像力を養うものである。サイードは以下のように述べる。「わたしたちの時代とわたしたちの国がつねに変わることなく象徴しているのは、ここに定住する人々だけではなく、定住せぬ人々、（中略）宿無しの亡命者、移民、放浪し虜囚となる人々の、資料に残らぬ激動の生である。」何者も排除しない市民教育は、細切れになりがちな専門化を乗り越え、再度、知識を有機的に紡ぎ上げて行く作業を求めている。知の改編が謳われて久しいが、20世紀後半から米国社会に警鐘を鳴らし続けた知識人の声に再度耳を傾ける必要がここにある。

●教員の著書紹介●

「トウガラシ ―辛味の科学」増補改訂版

幸書房 全345頁 2008年10月10日刊行 定価6,300円

岩井和夫・渡辺達夫（食品栄養科学部教授）編集

2000年に発刊された本書の初版の増補改訂版です。本書は、トウガラシの辛味に焦点をあて、トウガラシとしての歴史、辛味成分の分析法、成分の化学的特性、生合成、生理学的特性、調理での利用などをまとめた本であり、初版は、トウガラシの大量消費国である韓国でも注目され、翌2001年に全文を翻訳した本が韓国で出版されました。

今回の改訂では、近年大いに研究が進んでいるトウガラシの辛味成分カプサイシンの受容体TRPV1に関連した項目を、日本の第一人者富永真琴・岡崎統合バイオサイエンスセンター教授に執筆いただきました。また、本学食品化学研究室において1997年に構造決定がなされ、簡易大量合成法が開発され、2006年からは成分を用いた製品が市販されるようになったカプシエイトに関連した項目を、すべての研究が日本でなされた貴重な事例として追加しました。また、現時点において世界でもっとも辛いトウガラシを含む30種のトウガラシの写真と、4種のトウガラシを用いた料理の写真も新たに掲載しました。さらに、昭和30年代は輸出品目であったが現在は大量に輸入するようになっていくトウガラシの生産事情に関する特別寄稿を巻末に収載しました。



「緑茶のマーケティング ―“茶葉ビジネス”から“リラックス・ビジネス”へ」

農文協 全136頁 2008年9月25日刊行 定価1,890円

経営情報学部 教授 岩崎邦彦

みなさんは、“急須でいれる緑茶”と聞いて、どのような言葉を思い浮かべますか？調べてみると、圧倒的に多くの消費者が、「やすらぎ」「一息」「リラックス」といった情緒的な言葉を思い浮かべることがわかります。消費者の視点からみると、緑茶業界は茶葉を売るビジネスではなく、消費者にやすらぎやリラックスを提供するビジネスといっていいかもしれません。高齢化、ストレス社会、余暇社会の進展によって、やすらぎやリラックスへのニーズは、ますます増加していくでしょう。緑茶業界にとって、時代の流れは“追い風”です。

ところが、リーフ緑茶に対する需要は低迷を続けています。追い風を受けるどころか、多くの茶生産者、茶商、茶専門店の業況は低迷をしています。なぜでしょうか？

いくら追い風が吹いていても、それを適切に受け止めることができれば、せっかくのチャンスを生かすことができません。本書では、緑茶業界が“時代の追い風をいかに現実の力に変えるのか”、そのためのマーケティング戦略の方向性を、多様なマーケティング・リサーチをもとに提案しています。



「私本 会計・監査業務戦後史」

清文社 全407頁 2008年7月刊行 定価3,500円

経営情報学部 客員教授 川北 博

本書は、我が国公認会計士制度の揺籃期の中で、陸軍士官学校を卒業後、公認会計士として協会会長や国際組織の役員を歴任した川北博氏が、自らの会計人としての半生を振り返り書いた本です。本書では戦後から昭和に至るまでの企業会計制度・監査制度の変遷が、自身の体験と客観的事実を交えながら書かれています。現在に至るまでの日本の企業会計制度、監査制度、日本公認会計士協会の経緯を知る意味から、また後世に歴史的事実を伝える意味からも、資料価値が極めて高い貴重な一編となっています。

序章

第1章 揺籃期―新しい時代のはじまり（昭和20年代）

第2章 成長期―その混迷のさまたげ（昭和30年代）

第3章 転換期―新しい時代への陣痛（昭和40年代）

第4章 伸展期―国際化への足がかり（昭和50年代）

第5章 交錯期―ボーダレスな展開（昭和60年代）

資料



「退職給付制度再編における企業行動―会計基準が与えた影響の総合的分析」

中央経済社 全245頁 2008年11月刊行 定価3,800円

経営情報学部 助教 上野雄史

「会計」という言葉が、新聞雑誌各紙で頻繁に見られるようになりました。しかし、実際に「会計」は実社会にどういった影響を及ぼしているのでしょうか？明確に答えてくれているものはそうありません。本書は、そうした素朴な疑問から始めた研究の成果をまとめています。会計情報は、受け手の行動や意思決定に影響を与えるだけでなく、情報の送り手である企業の行動を一定の方向に誘導する効果をもつと言われます。2001年3月期の退職給付会計基準の適用以降、多くの企業が既存の退職給付制度を再編する方向へと舵を切りました。退職給付会計基準により作成された会計情報が、情報の送り手である企業をなんらかの行動へと誘導したならば、それはどのような形で行われたのでしょうか。その検証を試みるのが本書の目的です。



はばたき寄金からのお知らせ

モスクワ国立国際関係大学への短期交換留学生へ奨学支援金を授与

本学の交流協定校であるモスクワ国立国際関係大学への本年度の短期交換留学生として派遣されることになった国際関係学部3年の平野憲治さんと高田文裕さんに奨学支援金が授与されました。

平野さんは11月から1ヶ月間、同大学でロシア語などを勉強しました。高田さんは11月から来年3月までの予定で現在留学中です。



高田さん(左)、平野さん(右)

第11回学生スピーチコンテスト・第12回学生文芸コンクール

第11回学生スピーチコンテストが11月1日(土)の剣祭初日に開催され、審査の結果、次のとおり入賞者が決定しました。

部 門	賞区分	所 属	氏 名
日本語の部 (日本人)	最優秀賞	国際関係学部3年	鈴木 平
	優 秀 賞	経営情報学部3年	細 澤 あゆみ
	〃	生活健康科学研究科修士1年	内 川 徹 志
日本語の部 (留学生)	最優秀賞	国際関係学部4年	M.チンタカ マナワラタナ
	優 秀 賞	国際関係学部2年	ウィターナガ アサカ スリ ナーナル ロドリゴ
	〃	経営情報学部1年	グエン ミン ティエン
英語の部	最優秀賞	国際関係学部3年	青 木 友 里
	優 秀 賞	国際関係学部3年	青 井 奈 津 実
	〃	生活健康科学研究科修士2年	中 林 沙 織



スピーチコンテスト入賞者一同

また、スピーチコンテストに引き続いて第12回学生文芸コンクールの表彰式が行われました。

本年度は、川柳部門が新設され、文芸部門で27人から28作品(短編小説5、紀行文2、短歌1、俳句1、川柳13、詩5、その他1)、評論・エッセイ部門で1作品の応募がありました。

入賞者は次のとおりです。

部 門	賞区分	所 属	氏 名	
文 芸	優秀賞	薬学研究科修士1年	渡 辺 一 平	短編小説「うたづて」
〃	〃	国際関係学部2年	馬 場 歩	短歌
〃	佳作	経営情報学部4年	水 野 大 輔	短編小説「猫の話」
〃	〃	食品栄養科学部1年	山 崎 豊 実	川柳
〃	〃	国際関係学部3年	成 岡 和 矢	川柳
〃	〃	食品栄養科学部1年	杉 本 歩 美	川柳
〃	〃	生活健康科学研究科修士2年	鈴 木 文 子	詩「雪よりも深く」
〃	〃	経営情報学部4年	水 野 大 輔	その他「強盗ヘヴン」
評論・エッセイ	佳作	国際関係学部1年	両 角 達 平	「Fashion for the Passion」
文 芸	努力賞	薬学部1年	矢 澤 嶺	短編小説「脱走」
〃	〃	薬学部2年	一 木 幸 奈	俳句
〃	〃	薬学部4年	近 藤 雅 紘	詩「大きな一歩」

はばたき寄金に寄付をしてくださった方 (敬称略)

～2008年12月5日受付分

小林みどり (経営情報学部) ほか 1 名



文芸コンクール優秀賞受賞者の渡辺さん(右)と馬場さん(左)

ベルマーク集めてます！

ジョイナス代表 食品栄養科学部3年 那須田早織

はじめまして、ベルマーク回収運動サークル、ジョイナスです。ジョイナスは県大に関わる全ての人でベルマークを集め、回収したベルマークを国内外の援助に役立ててもらおう、という方針で活動しています。

色々な消耗品についているベルマーク、使用済みのカートリッジを回収しています。多くの先生、教授、研究室の方々の協力もあり、カートリッジ回収は順調に進み、12月の時点で1万点近く集まりました。各消耗品についているベルマークについては、残念ながらスムーズに進んでいません。こちらについても、カートリッジ回収箱の隣に専用の回収箱を設置してあるので、身近にあるベルマーク回収に御協力下さい。ベルマーク便りを回収ボックスの近くの壁に設置し、各学部ごとに何点分回収したのか、何に利用するのか、どんな商品についているのかを掲載しています。今後もこの便りを利用して、皆さんに活動状況を報告していきます。

現在、15人のメンバーで回収作業を中心に活動しています。活動一つひとつ手探り状態ですが、皆でアイデアを出し合い活動しています。この活動を始めて、今まで関わることのなかった方々と接する機会が増え、皆の温かさを実感します。

ジョイナスではメンバー募集中です!!ジョイナスに興味を持っていただけたら、この機会に参加してみませんか??できることからボランティア…エコなプチボランティアしていきましょう。



ジョイナスのメンバー



回収の様子

学内広報誌「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・学生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

教育研究推進部・広報室（はばたき棟3階）宛にお願いします。

E-mail: koho@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局 TEL 054-264-5130）

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>